

特54

64

西口流傳物語



西口流傳物語

○當る九月狂言 第一番目 (關ヶ原東西軍記場割左よ
序幕阿彌陀ヶ峯大法會の場) 二幕目 音川屋舖茶會の場
同伏見城内出陣の場 三幕目 石部宿三島屋共場同棒鼻松
並木の場 四幕目 音川屋舖自害の場 同、伏見本丸落城の
場 五幕目 青野ヶ原合戦の場、同伊吹山一ツ家の場 六
幕目 大結石山本陣詮議の場 ○片岡我童の片桐市之正、
大館刑部吉高、音川忠興 ○河原崎國太郎が政所、三島屋
女房おてふ、○坂東あらが春日の局 ○岩井松之助常盤の
局 音川與一郎室白梅 ○中村芝翫が徳川氏康、正直權兵衛
笠原正左衛門 ○嵐璃寛の新古今納言久秋、柴左近友行 ○
片岡我童の琴田出雲守 ○片岡市藏ヶ八十島式部 ○中村時
藏の由井直高、岩佐吉助、鳥居彦右衛門 ○澤村田之助御母
堂宇治君 ○岸田光成、音川の與方玉笹、三島おせん此他ハ
幕す

日の様に思て居たが最三年の大法會とい早い物だナア ○
チ、そふとも、夫よ付ちやア殿下のお跡續久頼様ハま
だ御幼年徳川様の後見を成され天下の政事を取成さる
る久頼様の御母堂宇治君様の女の事故此未行ごん成
事のと咄しの所へ就次郎の(高野修理)美寛の(辻形彦三
郎) 出来りコリヤ、中間共下として上のお樽杯致すハ
無禮なやつめが(辻形)イヤ高野氏今日ハ大法會成に無禮
の中間引立参り糺明致さんト立懸るを高野のイヤ其儀ハ
宜しからずまづ、お待下りな升(辻形)然らば貴殿も
任ずさん(高野)コリヤ四人の者今日ハ御法會故此儘も
し許以後をきつと憤みおらふぞ△平々難有存じ升ト四人
ハ下手に入跡は兩人あたりを見廻し(高野)兼て此程より
岸田殿と示し合せ一通り今日路次ハ待受不意ハ氏康を討
果し天下の災ひを除くの道理殿下(對)大忠是以上こそ
上策なし(辻形)夫よ付ても最早時刻大政所や宇治君も
御参詣有そふな物ト此時正面門の内より我童の(片桐)
上下大小まで子役乃久頼をいざなひ其外近臣四人付て出
來り(片桐)イヤ御兩所其御手段宜しからず止まり召れ

是よて就次郎美寛片桐を見て(辻形)お守り役たる片桐殿
も(高野)扱ハ様子ト(片桐)アイヤ岸田の差圖とやらで
徳川殿を討取杯とハ以手の外の義で御座る(辻形)イヤ御
世繼御幼君御母堂よりの御内意さば主君の下知を受氏
康殿を討取手配り(片桐)イヤ外事なれば兎角も氏康殿
を討事ハ仮染ならぬ一大事(高野)イヤ億一たり辰元殿(一
辻形)但ハ左程迄氏康を譽とやすハまいないよても貰
われてか(片桐)ヤアいわいて置ば其雜言殿下御他界の其
時に氏康殿へお頼有し御遺言を存じなきまの達て徳川殿
を討果さんとなれば天下の大事替難し此辰元氏康殿も成
替り相手を成すさん我君御免ト立上り双方さつと成此時
(久頼)双方控ハコリヤ今日父君の大法會御前をけのさ
ん杯とハ以手外成るぞ(近臣)我君様の仰の如く幼君補佐
たる片桐氏の御意に任せ濟されよト是を聞兩人思入あつ
て(兩人)無禮の段御許免の程願ひ升るト片桐辭義をする
此時向揚幕より御参詣ト呼是を聞(片桐)大政所宇治方
御参詣ハづれもお出迎ひ致されよト一同出迎ひ是をさつ
かけ又唄に成向より宇治の方、常盤局、附添跡より岸田光

成大紋の拵らへよて出來る東乃揚幕より大政所春日局
附添跡より新古今納言裝束よて出來り双方花道よて渡り
詞演ありて本舞臺ハ掛居並(久頼)今日ハ御参詣御苦勞
も存じ升る(政所)チ、久頼殿にハおとなし御成長成さ
れ祝賀と思ひ升る(宇治方)大政所もお替のふわりハ
おいても恐悦至極存じ升る(光成)久頼公にハ御壯健の体
を拜し恐悦至極に存じ升る(新古今)治部殿にハ殿下御他界
の其後嘸ありと此久秋推察の仕る(春日)只今の内御前
へまづ、おこしま升ト唄よ成正面の門内へハ入跡ハ光
成久秋殘る此時向にて御参詣と呼詠らハの鳴物も成徳川
氏康裝束拵らへ跡より由井琴田下下よて付添出來り花道
よ留る(久秋)光成(氏康公)ハ遠路の處御苦勞もござり
升(氏康)治部少輔ハ兎も角も久秋殿のお出迎ひ氏康痛み
入て御座るト是より本舞臺ハ掛り一同居並(由井)宇治殿
のお覺へ目出度光成殿ハつ、か御連枝の裂みかわり御登
庸ね浦山しき義でござる此時光成ひつとして(三成)今日
ハ御連枝たる氏田中納言ハ名代故不禮乃段ハ御用拾われ
最早時刻イヤ御案内上んと氏康然らバ久秋殿同伴仕ら

んと云を光成久秋を止るこなしあつてト、氏康久秋光成
共門内へ入跡より由井聖田主人壹人入て寺院入りと不察
心と由井跡より入んとはるを聖田止める見得て時藏我
當引はり寺鐘はやき合方よて道具まわる

○本舞臺三間高石の二重真中石の五輪の塔石の玉垣龍頭
の旗を立一面山の書割爰に前幕の政所宇治の方局二人二
重の上居並五輪の前より成蔵の(和尚)其外所化一同回
向をして居る見得音樂にて道具留るト和尚三拜して石段
を下り各々方御焼香成さり升せと云是より大政所と宇治
の方ト焼香前後の會釋をする此時橋掛りより氏康公出来
りアイや御焼香暫くと聲を掛る此所へ出座し(氏康)只今
止め一の壁へ御隠居なればとて大政所と御一所宇治の
方の焼香の其意を得ず願をたゞしてお焼香遊べしませ(政所)お先へ御免下さりませと焼香をする是より宇治の方新吾久秋する(氏康)片桐を見て次ハ片桐御身から(片桐)然らハ御免下されトよろしく焼香有て氏康光成と思ひ入あつて心付たるこなしにて光成殿ハ久家殿の名代と聞イヤ焼香を致すのよト云此時光成無念のこなしあつ

て氣をかへ(光成)内府公まづお先へ(氏康)上々へ媚へつ
らへ君の權威を笠よなく震ふ時ハ又七人の荒諸候に追つ
められてハ相成らぬ氏康お先へ焼香致すと式終る(光成)
只今の御意見難有く存じ升ると焼香を濟イヤ氏康公ハ
客分よて御休息遊ばし升せ(片桐)イヤ御案内仕らん(氏
康)久頼公ハまづお先へお入と我童芝齋國太郎田
之助松之助其外上手には入跡より新吾久秋立上るを光成止
め失禮ながらお待下され(久秋)光成にハ此久秋を止ハ
光成亡君の御遺命天下の政事を氏康後見あすとも天下を
返す心なく御家の爲故徳川内府暗殺致する一烈ハ御荷擔
下され但一殿下へ不孝の汚名を取られても内府へお心寄
たもふや有無の御返事御聞せ下されト會津黃門と令し合
せし事其外を(久秋)ハ、秀才英智の光成行届たる其こ
たへ(光成)御猶豫有ハ機密を聞て氏康へ密告召る御所存
成かサアハ、此時上下手石垣の影より以前の辻形
高野鉢巻よて伺入と晴見て(久秋)如何よも荷擔致した
ときつてうて久秋上手には入跡へ斷次郎美寛双方より
出光成様(光成)アコレトあたりよこなし有(光成)中納言

久秋今を迷の雲にれて荷擔なせハ是より上越祝よし(高
野)迹足の徳川氏康でも翅があらばいざ知らず退る事ハ
よも成マト(光成)最早手配なせハか高助思ひ入有て上
手へ入跡に兩人待居ハ上手揚幕より(氏康)イヤおら
れてハ氏康殆どめいてい致したと以前の芝齋子役の久頼
と抱て出来る是へまうか松之助付添出来る此氏康久頼公
を抱いておれハ諸天神も守護なせハ此氏康ハ大磐石心配
無用ハイヤれトひよろくとする所へ以前の辻形高野双
方より切掛る刀の光りハ局兩人ハアレト飛のく(氏康)
今のハ稲光りと見へる是でハ今年も豊天下泰平ぞや存
外ハ酔ふたハ深山ハろしの風ハつれ佛法鳥の鳴く聲ハ
物凄しとものハと向ふハ入跡ハ光成出来り又兩人と
久頼ハ抱居ハ故討もらせしと殘念の思ひ入(光成)左迄手
つひ致ハ置虎口を退れハ氏康いまだ時節が来らぬかと
三人引はりの見得よて道具廻る

庭あるさと思いの外閑道傳て此門外(片桐)御酒さげ
んのゆたわむれイヤ幼君をお渡下され(氏康)誠忠無類
の市の正抱参らせ出門せハ臣下の者も幼君の御尊顔
を拜せんと存つる故ハ酒興ハ事奇て無禮の段ハ許
してくりやれやアハ、真高のづれに有氏康師成をと呼
向ふ揚幕より以前の由井聖田袴立よて出来り大勢箱提
灯よて本舞臺へ来る(由井)今日大法會も事なく相濟御安
体よて御歸館恐悦よ存ます此時向よて遠奇ハ打こむ皆
胸りなし(氏康)ハ、俄ハ打立あの大鼓此時向より片市の
八十島式部一大事の御注進と出来主人光成の内命請會津
へ立越たる閑者立ハへり寶門ハほんの企此由御注進上
升此時以前の政所宇治の方中納言久秋出来る氏康ハ脚東
下降止らんと(片桐)如何成珍事わらんも知れず此時久秋
光成顔見合返ハ、も無念のこなしあつておだんハ成
ぬと兩人氣味合皆ハ引はりの見得遊露の鳴物よて幕
○二幕目 平舞臺正而金地ハ九明の星紋ちらハ襖總て伏
見音川家書院の模様爰に腰元四人居並ハ幕明向より近習
壹人出来り田邊ハ御隠居遊ばせハ大殿様ハ移入來此より

奥へ上り下されい(こゝ元)畏りまいた四人立上る此
時奥にて何父上の御入来とな我童の音川越中守忠興出来
向より片重(雄齊)チよあるじの出迎の大儀なるぞと本舞
臺へ掛り(忠興)父上も御堅勝にて恐悦の上まする夜中
に成てお出向に相成し(雄齊)余事の授置内談あれ暫
く近習を入拂ハアト一同左右へは入跡(雄齊)某つらつ
ら考見るよ此度家杉よむはんを起させ徳川殿を久頼公の
名代として關東へ巡下大坂まで軍を企つ者十又八九ハ
家杉と喋し合せ謀略也と推察致したり(忠興)シテ大坂
にて誰人やお見込座座るや(雄齊)先中國廣島の外よな
一此度汝が關東へ出馬の時家の重器ハ本國へ送り妻子
を入質と取れお身身刃があまるであらう(忠興)難有
必添舊思われ徳川殿へお味方致すか必成(雄齊)我等
に於ても萬足併やさば是が別れ成らんも知れず久方
りにて其方と名残りの茶でも催さんと上手入芝敷れ(一
笠原)我當の(伊賀之助)家老兩人出来り以密談をひそか
に伺ひにけんのんな儀の出来致した(伊賀)イヤ拙者の
我君の仰の如く末代迄の恥辱と思へば御出陣の御留守ヤ

預り討死致す心成なりと(笹原)イヤ討死致す杯との御免
一(伊賀)ハテにののしい共じやわへトあされし思い
入の所へ襖を明國太郎の(老女)此度の御出陣お祝ひのお
茶を催され升る(伊賀)武骨な産れゆへ茶事一向心得ま
せぬ(笹原)命を取らる程一大事でも御座らねばかふか
ふ頂戴致すふと是より老女が師匠番とんを恥辱よならぬ
やう(笹原)よいなに差圖を(老女)ドレ御案内をと伊賀之
助笹原の兩人袴のまだを直すを道具替りのしらせにて此
道具廻る
○本舞臺一面平舞臺山水を畫書一襖止面床の間総て音川
家廣間の模様袋又以前の我童(忠興)釜へ水ヤとして入上
手は市藏の(幽齋)高助の(奥方)松之助の娘其次へ子役の
與八郎妹駒鳥いづれも居並道具止る風につれ遠山寺の鐘
の音いとあわれを催してと此内駒鳥茶を香で仕舞茶碗
を留齋見て(幽齋)流石ハ嫁の躰から子供等へよくお
一へたかんふく(奥方)心入たる其詞此大坂へお出わ
ればお茶を催し差上んといわすせし甲斐も無開果へ我夫
の御出陣(娘)是も付ても與市郎様伏見へ御出陣歸邸取れ

ぬのわ名残り惜み存じ升る(忠興)ヤアアさば目出度出陣
と慈を服ひの不吉なるぞ(與八郎)父上様兄上が御無事で
御歸陣遊ばす様(駒鳥)ハ茶碗ハおぢ様は目出度お歸し
か升る(忠興)兩人の重役共如何致したと言折以前の笠
原伊賀之助老女出来り平伏する是より笑みみの茶會の末
(忠興)兩人の家老よ向此度關東出馬の先陣討死と覺期
致す跡又残る子供等徳川殿へ馳ひ家督を頼具よと頼よ
笠原稻富の兩人ハ次へ引取跡見送りて連席を進で兩手
と突と國太郎の老女進み出我君様におね討死を聞忠興武
門の習らひ珍一からすと立上る折向より近習出来り與市
郎様御入と知らずを幽齋御内命の使とわれれば我ハ
跡心ハ残れ共、與姫子役老女上手襖へは入向より我當
の與市郎出来り大坂城の追討の手配り有よよと御手人
數差添られ上馬まで参つて御座る然れば仕度致さんと
上手へは入跡と與市郎只壹人所へ白襖を明出来りくと
さあり所へ高助の奥子役兩人連出来りヲ、出かさた嫁
御寮與市郎心残さず出陣一や白梅のなげく此襖時の内よ
り雄齊出来り慈をかくしとさまし親子じやのふと奥子

役兩人を左右へ抱へとつと泣老女姫わつと泣伏雄齊の見
て不便なとふこなしめて道具廻る
○本舞臺総て伏見城中夜の体時の大鼓まで道具止る
酉井彦右衛門此親父をお召にて有難き仕合(氏康)先刻音
川忠興を迎ひに遣したり是よ一献門出の盃せんと相繼
の(内藤)酌をして盃を酉井よさす此所氏康公武田は退立
られ濱松へ入一事より種々咄の折向より音川忠興出来
り出陣を祝ふ氏康公忠興も盃を出すト彦右衛門扇をひ
らさ立上りひよるとしてさつと留り是にて下座の諸よな
りぢんばの思ひ入もて鐘燈の舞を舞(皆々)イヤ御山
馬ト(氏康)ハテ心地よきト床をこなれ立上るを切掛の幕
○三幕目石部宿三島屋の場 本舞臺正面田畑の書割草土
手九太作の掛茶や東海道石部宿と印たるハ総て出茶やの
体爰に雲助酒は酔たるこちにて腰と掛る馬土唄まで明
響次、尉五郎、新之助、升次郎自性の拵まで居並御仁徳の
徳川様の御津へ御出張と渡り詞演有てみな(上手)には
入跡向よ高助の(おせん)出来る跡より瑞寛の(紫左近)
深編笠大小拵へ同片市の(八十島)同道出来り花道まで光

成おせんと呼止兩人編笠をとり床さへ掛り(光成)八十島
氏の手前無事乍當春佐和山より大藏殿迄参りし節三
島やへ止宿の折訓染し此おせん御煤介の義を頼し事(八
十)早く御邸内へ御運成れ(光成)時におせん身中の頼が
有ら聞て呉ぬおせん改つた其詞わなれたの事なら命よ
掛ても(光成)外てもな一氏旗を殺してくりやれおせんび
つくりせしがトイ毒藥をねせん請取思案乍向ふへは入光
成八十島の兩人上手は入上手より以前の百性出来り正
直權兵衛を起し芝術の(權兵衛)起上りいつべいやつた所
からツイとろくど寐むけがさし大變な心配の出来と手
拭を肩へ掛ると道具廻る

○同本舞臺中足の二重正面上手床の間下手冠木門此前よ
徳川公御旅宿と印たる掛札都て三島屋庭口の体浮合方
めて道具止る爰又時藏の(由井)我童の(柴田)時三下女
の拵へにて控へ居る徳川様の御止や仙の折又向よ
り以前のおせん出来り(由井)請かと思へば仙のお聞の
凶か吉か(ほんだ)由井氏の仰の通り母か病氣と有なれ
此金子を遣して呉と出すようおせんハ請取すト三島屋

の妻出来りて此金を預る是より由井屋田の湯殿に至り跡
よの獨り女氣の戀と情よからめられ何とせんと思案の吐
息此時以前の權兵衛折口の外に伺邊り見廻し進みより
(權兵衛)さつきおれが棒鼻の茶見せで開たのつびきなら
ぬ頼の一件大思請し徳川様すぐに訴へ様と思つたのあり
やアとよする氣だ(おせん)思事千里能知るまいと思ふた
もお前か此まやんしたとテモ恐ろしい此身の罪仕違ぬ
時此家へ夜討を仕掛彼の方を討取手筈との事(權兵衛)
イヤやらかすのハ無分別と權兵衛の意見よおせん思案
を定め權兵衛ハ詞發して行跡よおせんハ思案くる折後
より(宗兵衛)出来り大膽者一寸もうち居なと逃んどす
るおせんを引戻し襟取取引付ケ後て聞し女房も此所へ
出来りお客を殺す心もあさ様すまあしつてと止る折
おせんハ覺期をさめ立上る宗兵衛おせんを目指追掛るを
女房止る此内おせんハ毒藥を出しつばいの拵約にひた
し吞其汁譯ハまつ此油り夫婦ハ左とと驚くお仙ハ苦痛
の泪乍氏康様を毒殺せよと頼まれしと始終咄す折しと有
徳川大將早小具足に身を堅め供人引連出来りお仙の吊ひ

料を渡され亭主何かと世話で有たと一同引連雨中を出立
する此跡へ權兵衛此所へ來りお仙の死せしを見て涙く此
時向より八十島出来り氏康の出立を聞殘念なりお仙の死
体を見て薄氣味悪く立歸る宗兵衛夫婦思ひ入有て正直權
兵衛下り居させるを掛切て暮

○同 本舞臺田畑の書割松の立木敷疊棒鼻松並木の模様
爰又瑠璃鏡兜鉢巻よて鏡を引掛士卒六人鎗を持立並道具
止る此所へ八十島出来り御賢察の如くお仙めが仕損一
柴左近)大事を女又頼しハ此左近が一性の誤とたんそく
の所へ向より大勢の人影に徳川よりあらさるか一同小
影へ忍ぶ向ふより裏菊の紋の提灯供廻り付添出て来る左
近の士卒十二人鎗よて突て懸る乗物を捨て行跡松かげよ
り柴左近八十島出左右より立懸り此道を夜に入通行なす
其姓名をお名のりわれ此所我童の(大館刑部)まびー出
やア無禮至極狼籍致す其方共よりと云聲よよくくみれ
ハ越前の大館氏(我童)左いふ二人ハ佐和山の柴八十島な
らすや拙者ハ露路を急かせ雨中乍も参りし所此ろふせき
にハ殆ト迷賦是より左近呼子の笛を吹供廻り出来り親を

かさわげ左近持たる鎗をつくを木の頭よて柏子慕
○四幕目 音川屋敷自害の場 本舞臺向ふ九曜の星の紋
ぢらし都て大坂城外音川屋敷廣間の体爰又諸士四人居並
幕明此所へ向揚幕より上使兩人來る出向ひとして家老笠
原庄左衛門同役稻富伊賀之助上使爰を去る(斬次郎)上使
今般會津追討し付忠義厚き等ハ二心なき其証に妻子を人
質に即時に入城致さすべし(笠原)主人留守中故取片付と
致する間暫く御猶豫下され(上使)頼ひま任せ申の下刻迄
猶豫致す御座る(伊賀)大慶至極に一同御座り升詞よ
り上使ハ向ふへかへる跡ハ笠原思案の体石田の巧みよも
せよ久頼公の上意とあれはせひもかし(伊賀)扱ハ御決心
に成られ升か入城なき其時ハ忽四方へ火を掛て見る間に
敵ハ賣亡されん(伊賀)といハ此儘又(笠原)ハテ善ハ急
げ惡ハ延ろト芝術我童無念のこな一早舞にて道具廻る

○同伏見本丸落城の場 本舞臺三問の間常足の二重銀襖
都て音川家奥御殿の所腰元四人居並若殿立腹よて浦人形
の首を落し小性文彌を退廻す所へ奥より國太郎の(老女
漣)出来り止る人形の首の落しを見て思ひ入所へ以前の

(笠原)伊賀)出来りて御上使様の御入の義に付奥録とお
目通致度連共付せんと立上る折知らせに及ず只今それ
へト高助の(奥)一間の内よりまづと出来る神儀正し
く中重の真中と奥、連、笠原、伊賀居並笠原奥様に伺ます
る先刻御上使へ御返答有し如く御入城遊ばし升るか(奥)
御上意故是非なく次男與八郎駒鳥をも伴ふて人質又御城
内へ参る心じや(連)人に先達御入城遊ばし升り(伊賀)久
頼公の命成と云ひ石田の奸計故御入城へ御恥辱と存し升
ると詞正しく云此所へ松之助の(白梅)出来る本國へ立退
の事をす、ひれ共命かおしさま未練又笑へ、笑へ上使諸
共御城内へ二人を連れて行上りいつ逢れるか知れぬ身の上
(白梅)スリヤ母上様は(奥)是が此世のと白梅跡へ心の
残る事ありて親子の分れ白梅、連、伊賀之助へなく、
向ふへは入跡(奥)嫁老女連本國丹州田邊へ落せし上り
心置事なし殿此恥辱にからざるや上使の來ぬ内自殺せ
ん(笠原)未だ十才満未若様方おいたわしく存する(奥)因
縁ありといひ此身の上と是より明智光秀此娘にて音川家へ
嫁せしなりと子役二人を左右引よせ愁のこなし十分よ

笠原もはつと斗りま差うつ向ひて兩袖あわまる泪とわ
つ、ひと若君駒鳥高助あすがり殺してと云より奥の目を
どし駒鳥の胸元へ突立る駒鳥アツトくるしみ若君ハ母上
御介借と苦しむ奥ハ今、是迄短刀逆手乳つ下を切苦
痛の折から向ばだ、まなり以前乃美寛(上使)出来るを
我童の(伊賀之助)出来り一刀に上使を切(奥)笠原影腹を
切出来る伊賀之助介借ハ、アト後に立上り高助之斬我童
三人見待幕
○本舞臺見附石垣向大門口城門三重の櫓小手脚當陣
立の模様どんちやんと幕明爰に軍兵相藏○(神林竹齋)
を取巻立廻りの所へ向より三人兵逃て出来る其跡より市
藏(西井彦右衛門)白髪頭鉢巻にて追掛出来り大勢を
相手大立廻りの未たおる、所へ市藏の(元忠)出来りて
鳥居を助起し、兩人尙切入んとする所へ以前の神林駈來り
元江州浪人深尾清十郎の變心よて最早落城と聞より兩人
立上り所へ又兵士押來りて立廻り此所へ鉄炮の音して兩
人打れし内藤鳥居もふ是迄、兩人下は居る向揚幕より新
古中納言久秋公只今それへと瑠寬の(久頼)出来り此深手

での存命叶まじわたら老士に討死させしも深尾の裏切變
り安きハ人心じやなア手負と思ひ入有て幕切
○五幕目青野ヶ原合戦の場、平舞臺二重の草土手破たる
庚申堂下手に石の井戸遠見陣所、と見せたる關ヶ原
の書割都て石原峠裏手の機槍兵士四人鎧形よて居並幕明
爰軍兵億川殿ハ八万余騎味方の佐和山の催促により西國
勢が十万余軍奉行大館殿味方の勝利疑、なアレ、
向よ二人連こちらへ来るハ、さら何れも心得たりと小影
入此處へ前幕の國太郎(連)松之助(姫)旗形よて兩人出
來り(連)アレ森の小影は億川様のお旗が見得升と本舞臺
へ掛り折以前の軍兵はらくと取巻手込よせんとする連
立廻り有ト、兵卒と追まくる處へ前幕の片市(八十島式
部)出来り白梅よれんばする(連)狼藉かくと、やと兩人
立廻りの處へ上手より軍兵を追掛ながら以前の我當(與
市郎)鎧鉢巻よて出来り此處へ参り白梅に面會双方驚き
與市郎八十島を突伏る(姫)爰よて巡り會まいたハ正八幡
の加護成らんと此處少く時有らん(與市)又再會も致さ
ん、方一武運よつき討死ささハ加州の里方へ届けよ左

様なれば我妻様是にてお別れ申升と泣伏を連向ふ
へは入跡と與市郎陣所返り四めせんと上手へ行時軍兵切
手掛を切たか、追掛上手よは入折しも橋掛りより乗物を
かつぎ跡より時藏の岩佐吾助附添出来り幸ひ是よ石の井
筒休息なさんと繩を立る中より我當(大館刑部)鎧鉢巻直
垂よて出る岩佐吾助爰の何と申處じやア(吾助)石原峠よ
御座り升る(大館)さるにても幼年の頃より軍配の當らざ
る事なきが如何致して俄のくすれ(吾助)夫を味方の裏切
有て佐和山殿の本陣より俄に動亂致せし故(大館)味川と
見得億川へ内通一軍機くじきし物成か主従咄しの其處へ
兵士八人抜刀を持って切掛るやア目官軍師の大館刑部イデ
おれ、手取にせんと是より吾助立廻り之末吾助向ふ
へ追掛行跡ハ刑部八方へ心を配る後より伺寄たる兇手の
兵士切掛る目官の立廻りト、手負となる既に危き處へ三
幕目の瑠寬(左近)一目さんよ此場へかけ來りヤ、大館
氏に、是に有るか(刑部)左いふハ左近友行ならずや(左
近)如何も友行シテ裏切ハ何人成ぞやうれど別人なら
ぬ新古中納言何久秋の裏切せしかと見へぬ兩眼打ひらき

兩足すつくと立ち余人かれはさ知らず大政所の御養子たる家門の身に有なむらとはがみきて血をそぎ左近も怒りの忍び兼無念と最早天下の御威光是迄にして徳川四海を握る時至り忠義も返つて不忠なりといさ切腹せんと小サ刀を抜腹を突立瑠璃鏡を抜捨落散たる陣笠をかむり花道に至る兩手を合舞臺を拜す軍兵取掛るを切拂い向ふへは入我童ハ刀ヲ引廻す見得よろし有て幕

○伊吹山一ツ家の場 本舞臺三間中足の二重竹簀の縁正面鼠の破壁廻屋根都て山中一軒家の休爰お國太郎の(老婆)娘お仙の吊ひ皆さん澤山あがつて下されと給仕の摸樣まで道具止る芝断此(權兵衛)大事を娘先へ死なれお望のさぞかなしく有てわろふと折し尋て來るのよと相識の百性チ、そふともく(老婆)大きき運く成ま一た權兵衛さんゆつくり吞で下され哉權兵衛ハ奥へは入老婆も勝を片付て奥に入「暮近き秋の日脚も西山へと高助の岸田光成向よと出來り鏡下の上へ鏡を引かけ竹笠を冠り跡見返りて打らなす頼々とおとづる、以前の老婆立出てハイトなた様こちらへおは入成されま(光成)然ハ許さや

れとすつと通れハ(老婆)モンあなたハ軍場から出て浮出のお方でハと問れてさつくり落人なと知せじと身供ハ關東方由井兵部直高落人せんぎの其爲來りしと云所へ以前の權兵衛奥より出來り由井様と云お方ハモウちつと年をとつたお方様と存じましたイヤ夫でハハ兄兵部様を其方ハ存じて居一か(老婆)幸今日ハ供養を致し振舞の酒も残りて居升れば(光成)然ハ御馳走預らふとわらんじ手お持要用も隨ハ奥入入跡ハ老婆ハ親の許ハ不義をして親ハ難義を掛たる男と知らぬ山路を踏分てと此所へ瑠璃の柴左近出來り見れば老婆只壹人回向一てれる様す此家の内に聞事あり主じハおらぬか(老婆)此聲を聞落合にてハなさやと云左近思ハ入有て身供關ケ原まで勝利を取一關東方の由井兵部と云より老婆乃不審顔先刻由井様がお出お奥ハ御座ると聞て扱ハと主人光成様ハ有ざるやと思得也尙も知らぬ顔君敵方ハハわらざるやと云折老婆ハ裏の奥ハ行跡ハ左近御主君に年齢物と一符合なせと油断のならぬ佛たんの内を見て秋露貞仙信女俗名せん八月廿日奴ハお仙の親里ハ伊吹の奥と聞たるのと

其親里へ泊るとハ二重よりあり腰を掛わたりに氣を配り遺具廻る

○同 一ツ家奥の場 芝断の權兵衛酒盛の中ハ柴左近と云侍ハ此家のお仙ハ頼徳川殿を毒殺せんとなし義理人情に死ましたとハチふびんなと思ハ入有所へ老婆かも一お兄様がお出ハ御座り升と取次ハ權兵衛ハお兄様ハ私かよくお顔存じます故と立上るを光成止其顔ハたちを聞我兄ハハ有まじくと云折此所へ入來る左近顔見合互よびつくり是より數刻の内談を聞て老婆と權兵衛ハ表の方へ出て行跡ハ光成ハ切腹せんと云左近ハ一度此所を落のび久頼公ハ御難義掛る事の恐ハり頼すくなき事共ヒやあアと折柄權兵衛出來聞たハ其秘密と云より双於より切掛るに手負の權兵衛是てすましの身の申譯とおせん死せし事より終中咄す老婆ハ泪みくれ光成様と存せず訴人致せし故早く此場を落延下されと云時捕手大勢押來る光成ハ捕手を相手ハ立廻り左近ハ頼の御印を預り大勢を切抜向ふへは入跡ハ光成老婆の前へ吊料と金を投るを木頭よて幕

○大話石山本陣詮議の場 本舞臺一面常足の貳重石垣左右に紫花幕を張総て石山觀音堂の書割向正面左右水引打返し近江八景遠見の音浪の音よて幕明爰に升次郎善次鉄次郎兵士鏡形たよて出てさりくハおめ時の太鼓になり前幕の高助鏡下の形ハ繩ハ掛り引立られ出て來りしより時藏の(由井 我當の(岩田)珍らハ岸田光成日外伏見藤の森よて七人の荒諸侯の手ハ引渡さばなふと殺し君のお情よて命助り其高恩を打忘れしか(光成)アハ、燕雀何ぞ大鵬の此光成の意中と知らんや(由井)大地ハ座して下に居よ(光成)伏罪致さぬ其内ハ捕縛成其召人取らば「折から奥に聲有て徳川氏康夫ハ參つて調をなさんと芝断の(氏康)まづ一と出來り壹人の兵士草履を持出ハ光成殿君の御許是掛られよ(氏康)コリや光成ちハ適忠義者成テ(光成)何んと此光成を適れハハ氏康汝天下を掌握不す其氣さハ頼ハ成べき諸侯と私ハ因みを結び天守を建築致せし段其云譯有やハかに此時由井岩田不禮の中立と其分よハと云を氏康公押止メ久頼御印の認ハ掛久頼の寶印とわれハ其儘ハ拾置難くまつた光成謀書謀印を作一ハ明

白に申立よ如何も光成久頼公の謀書致せりと主人をか
ばう心のそ愛へ我童の片桐辰元御印を三寶よのせ出来
り氏康公に上覽入るト光成伏罪する大罪人の光成所
刑の儀ハ某にお任せ下さる様に片桐願う處へ上手より
瑠寛の(忠行)其介借ハ此忠行君へ願つて仕らんと出来る
氏康公忠行よお任せある(光成)ハア忝なき音川侯と智仁
勇士も家の名の徳よなびき一秋津國納る御代ぞ目出度け
れ皆く引ばりの見得幕切

○第二番目 獨花孤葉 三幕 大切淨瑠璃

葛の葉姫、孤高の葉、奴小勘平が嵐瑠寛(奴與勘平片岡
我童(信田の庄司)片岡市藏(石川悪右衛門嵐美寛
庄司妻まがらみ松之助(腰元)おた巻片岡我當奴やかん
平中村時藏(安部保名助高屋高助以下客す
○序幕 信田の森の境 本舞臺上の方紅張の鳥居同じく玉
垣石燈籠同手水鉢有櫻の林紅白の段幕上は方出語り愛よ
相中の勢子割竹を持立懸りレヤンくよて幕明今日白狐
がてハ悪右衛門様よその仰付そりや狐だ生捕くと皆く
狐を追廻下手へは入跡唄に成向揚幕より小性腰元を連

出來り葛の葉姫(瑠寛)出來り花道にて例の渡り詞演有本
舞臺(掛)腰元(石川悪右衛門)がアノお姫様にかつ
惚よふ(ねだ巻)イヤモウお顔とい、お心といひ悪右衛門
とハ打て付男戀し私しでさへいやでく成ませぬわ
なア(葛の葉)本よいやな殿顔退付父母様にもお出のばづ
お待す御一所に參詣すそふわいの(腰元)幸ひわれ成幕
の内へ(皆く)まづ入せられま升ト唄に成一同幕の内へは
入向より安部保名(高助)素袍下斗りの拵へ小袖を脊負扇
を持出來花道よて「上るり戀戀我中空よなすな戀こひ
風がきてい袂よあもつれ亂れつかれ風情にてまばし
たわいもなかりけると振事よて本舞臺へ掛るト向揚幕よ
り奴與勘平(我童)出來りモく、旦那保名様奴めで傍座
り升お心を付られませぬエ、正体もあき此有様サア
御館へお歸り成れませと引手を拂われく枝にゆかしさ
人ハ見たり嬉しや袖の枝の身を通しト此内保名様枝
よ小袖を打かけ泣伏與勘平いろく介抱しコハ情なき旦那
那樣草や木をこがれたとふ滑ひのろら目(保名)何ら目
トハ夫そこにト狂ひ亂る、斗り成此時幕の内より葛の葉

腰元出來を保名見て(保名)やア柳の前なつめしやく
と抱付を腰元姫をうこひ留るを與勘平が私一の主人保名
様の思ふ人よ分れ戀故ハ狂氣成れまいた故お姫様より只
一ト言のお詞を頼めお姫もまだうら若き心よぞいらへ
なければ腰元共姫をすくめ見る程めわらし殿ふりと
云是よて保名正氣に成わたり見廻し思入有て面目あげ
に主従手を提悦女(葛葉)其お小袖の見覺の有柳の前様と
いもしや加茂の保教様の(保名)其柳の前で御座る(葛葉)
やのろれ私一の姉様とはつと斗りに泣まづみサア其御
縁の有姉さんと御言替し成れしお咄しを(安部保名)さんで
何と致しませ升愛ハ往來幸ひのアノ幕の内(與勘平)旦那又
あな(葛葉)そんならわをこへ保名様と「岩木ならぬ
ハ葛の葉もと兩人幕の内へは入跡に奴與勘平へ大勢の腰
元いやらー見得ありト腰元おた巻幕の内をのどこふ
とするを留るア、ふ行せきな最前より余程の間お姫様よ
も御用もあらうサア皆さん御さんせいト腰元皆を幕の内
へは入(與勘平)やれ、女中方と云者ハ騒ぐ、い物たナ
ア此時おた巻出來り若奴さんは程思ふて入者を少ハ私

しが云事を聞て呉ても下さんせとひなだれ奇を突倒一奴
ハ幕の内へは入跡大柏子よ成り向ふより信田庄司(片市)
羽織袴大小松之助ふけたる拵へまがらみの兩人出來りサ
ぞ娘が待て居ま升と兩人本舞臺へ掛る折柄以前の葛の葉
姫小袖を持出來り母よ渡す母ハ見て庄司よ見せる(庄司)
此小袖をバ葛の葉が持ていやるどト云時其お咄しハ抽
者が致しませると幕の内より保名出來保教の弟保名よ御
座る御息女柳と夫婦の契其後家の秘書の言譯ハ柳ハ自害
加茂の家ハ斷絶と涙あがらぬ物語れバ庄司夫婦も身をな
げ伏老の泪にくれよける(保名)其お悔ハ御尤今申も如
何あれ共葛の葉殿を給らバ姉と思つて、某ハ力よ致し度
此事お頼申升る(葛葉)姉さんよお分れたよりなき身と
かつまやるからハ(腰元)柳様の其替りお葛の葉様と保名
様へ(庄司)其頼尤も成が愛よ一ツの難儀といふハ身ハ弱
石川悪右衛門儀葛の葉と妻よくまを望めと娘が嫌ふ殊に
身持もあしけれバ先石川へ斷りやうれ迄ハ返答もやされ
ぬと云折貝鉦の音間近く森の方より年古白狐欠來り葛の
葉保名の真中へ助けて呉といわぬ斗り隠れる故保名白

狐を助けてやらんと祠の内へ抱入狐の嬉しげに四方を拜
しかみ居る此時向揚幕より悪右衛門(美寛)狩くらの拵
へよて出来り狐を取逃し残念に思ひし女房符とて葛の
葉の手を取て引立る庄司さへる此時勢子の大勢出来り
葛の葉を引立行んとする安名出来りて勢子を投る(悪右衛
門)アアぬい安部の安名柳が死だもへ妹を取にうせたる能
と参つた加茂の後室を殺せしをのちあらん夫を引込伯
父も同罪サア葛の葉を渡せしと取巻(保名)奴與勘平此
處の保名の受取たり汝の各々をお供せよぬかるないろげ
(與勘平)畏ました奴がお供すれば大丈夫だサア早く
くと庄司夫婦葛の葉皆々向ふへは入跡六人の勢子一同よ
掛り立廻りの末保名氣せつする悪右衛門葛の葉を取得ん
と勢子を連向ふへは入「保名の五鉢も砕くる斗り手足も
ひーのれ目くるめき苦しき息をほつとつ保名無念く
と齒がみをあし切服せんとする處へ祠の内より狐の葛の
葉(瑞寛)出て切服止る保名の狐と知らず二世の約地をす
る折しも以前の與勘平出来りて(與勘)お旦那是も出有
いや何れも様のお供して府中の邊迄参りし處石川又出會

し勢子のやつらも追拂引返り参りに葛の葉様もいつの
間もコリヤ奴めをだしぬいてと云時揚幕よて勢子の聲ひ
(保名)又もや愛へ悪右衛門(與勘)さやつと逢さバ何か
の妨お二た方いわれぬる内へト保名葛の葉の幕の内へ
は入向ふより悪右衛門勢子を連出来り本舞臺へ掛る此内
與勘平姫の小袖を冠り姫の思ひ入をする悪右衛門姫は是
まか結の神の引合サア葛の葉殿と袖を引ばる與勘平逆様
とするかやい逃さぬくどりとや御面像をと見よて小袖
を取悪右衛門胸りして(悪右)ヤア赤奴め愛も信田の鳥居
先玉をこつちへ渡せばよー稻穂何ぞとぬるすのさいさう
ぬの命も袖揚覺期極めて返答とサアくく(與勘)はさ
たり悪右衛門此奴の引導で爰で信田の出となれト大手
を廣げ身掛へたり是よ立廻りと成ト勢子を花道迄追
て行後より保名葛の葉出来り長追無用と止を奴の本舞臺
へ返る(奴)拙者が追ぬも與勘平(保名)汝が追ぬも與勘平
(奴)御夫婦中も與勘平是も信田の神のお恵みト兩人手を
合して拜ひ此時本釣鐘を打(奴)アリやもふ入合(保名)チ
住吉と隣りたる安部野の我本國暫くかーこ引籠り時

節を待んと葛の葉の手を取上る其時勢子壹人切掛るを投
是のとつこひーロイヤサと人目を忍ぶ夕暮よーと保
名葛の葉花道へ掛る「夫婦いざない津の國や安部野と差
ていそぎ行幕切

○二幕目 機匠狐別の場 本舞臺三間葛家喜平家の体
上の方神棚下の方物置繩すだれを掛都て安部の保名託住
居の体門口よ木綿買三人立掛り居る隣り柿比木の唄にて
幕明仕出しの三人此家の女房い何とぬ女じやアないか
と橋掛りへは入跡義太夫よなり向揚幕より童子(和二郎)
竹の先へやんまを結付出て来り門口でころふ「母の機家
を立出ても(瑞寛)葛の葉手拭を冠り世話形よて出で童子
を見てこちらへ来りチ、何をしやる殺生を好んでろくな
者にひなるま必す虫けらを殺すよと叱り有しをわす
れてか與勘平の京へ行父様のお留守の内は怪我もあつ
たら濟ぬハ此母(童子)イヤ何もしやせぬモチン母様松虫
塚へ虫を取行ぞや(葛葉)是のたり又其様なだいをい
わすと寐てたものと「母ハ添乳の枕元布團の上へ横み成
添乳をする所へ向ふより偽木綿買(相蔵)股引わらんじ風

呂敷を背負計を腰よさし管笠を冠り出来りお内儀此頃の
雨續でめつさり木綿の直が能半足でも賣て下され(葛葉)
今子供の内入はな高聲よ物言て下さんすな家の内をきよ
ろく合點乃行ぬ木綿買で有りぬの(偽買)コウろろ、
見廻ぬ内儀の顔織御り少いでも買て下さりませぬ
か(葛葉)いかなー一尺もムらぬ程は長居せすとんで
下さんせ平く双御無心よ参りま丹とすくく出て向ふへ
歸り跡よ葛の葉童子を見て大事のこの掛り子殿着物を
織つてやる程よ父さんのお歸りを待やいのと「二枚屏風
を建機前に着掛ると葛の葉の機家へは入向より(片市)
庄司野袴大小(松之助)妻着流し跡より(瑞寛)二役葛の葉
箱笠を持出て花道へ掛り爰の往來まアあれへ来やれト三
人本舞臺へ来り盤殿何ぞ替つた事でもあつてハ氣の毒
娘と私し隠れて入程に早ふ達せて下さんせと兩人下手
の物置へは入庄司の上手の窓乃所へ行頼升くくと云「此
所(瑞寛)早替りにて狐葛のばよ成てハイをなだじやへ
顔を出す庄司是を具て胸り障子を建る庄司の内と外よ兩
人の葛の葉の居に驚き兩人上手へ来り窓より覗く狐の葛



の葉誰じやぞへと「いふ聲迄似いせぬとやつぱり本の葛の葉も肝をつぶし母の手の引下手へ来りどもした事と三人顔を詠合溜息をつく折から立歸る安部の保名直も本舞臺へ来り庄司も互は無事の悦びを演サア〜おは入成されませと行んとする保名れ缺を庄司の控へ葛の葉を保名引合せ保名も不心に思ひ信田の森より葛の葉と兩人此處へ立退早六年安部の童子と申五ツに成悴までもふけし事を咄〜コレ葛の葉兩親の前じやとて其様ませすと童子をお目よ掛やいのと云是より保名も不心明ねバ三人を物置へ忍ませ「保名何の風情もなく内に入童子の母のあはさぬかアイ〜と奥より狐葛れ葉出来る保名の童子へ土産を出し色々ため〜みるも何も女房も替〜事なく（保名）けふ歸りなげよとなたの親庄司殿御夫婦又逢た葛葛ニ、そりや本間よかへ嬉し事で御座んすと此内保名の枕を〜寝入思ひ入葛の葉ハ私しもさつぱり髪でも結ばふ心のとつおいつ忍んでころの伺けると上手の機屋へは入表よ伺以前の商人四人出来り葛の葉も相違お〜悪右衛

門前に差上るとバ立身出世と皆々小影よ入此處へ以前乃葛の葉出て「妻ハ衣服を改めてまは〜として出来りア、取〜や後間〜や年月つ、みし由妻もなふ今本性と願〜て妻子の縁も是切又別れねバ成ぬ此身の上御身寝耳も聞覺へ父よあくと傳へてたべと（狐葛）我ハ人間ならず六年以前信田よて助けられ再び花咲狐ぞやと（此時璃寛衣裳を引抜〜今別る、とて思ハわれ共恨みハな〜庄司様の御夫婦を誠の爺様と葛の葉どのと眞實の母と思ふて孝行せよと是より親子の分れ愁歎ありト、硯箱を出し墨と摺筆をく〜へ童子と抱わける此内道具廻る ○本舞臺二重本様付向ふ一面世話障子下手四ツ目垣総て奥座〜の体一秋の千種の裏かれて千種の袖のうらかれてト此内葛の葉障子へ「戀しくバ尋来て見よの口文字を書思わす泣伏聲よ保名一ト間を走り出委細ハ聞た何ゆゑに童子を捨てやるべきかを取付を童子を捨〜ロ〜は成狐葛の葉正面の障子の内へ消る（保名）た〜へ誠の葛の葉よあらず共なせ打明て本性を明さぬぞ童子不便と思ハぬ〜と「呼ぶる聲よ庄司夫婦葛の葉も出来り（庄司）むざんぞ別れを見る物じ

やと夫婦の悔りバ葛の葉も手持不沙汰に見へける（葛の葉）チ、よい子じやと抱上れば（童子）イヤ〜此か、様〜ハ乳の無い、様〜保名ハた〜兼大聲あげたとへ野干の身成共五年附添命の恩を報せすや童子の母やアイと一泪乍よ呼立れば後ろの障子よ一首の歌〜是にて皆〜心付（保名）扱〜一首のかたみをとのこし我に名残りハのこらす共童子ハかわゆくかいわい〜やいと言折から向より以前乃四人出来り保名葛の葉庄司夫婦イ〜覺期致せと呼わつたり（保名）やア小さ〜し〜其一言此葛の葉の望なら保名を討て連れて行けと是よりせん〜は成立廻りの末一同下手へ逃ては入（庄司）保名殿怪我ハなあり〜か（保名）一先追退け〜の又爰へ来るべしとつて返さぬ其内に（庄司）如何にも此場を立のかん（保名）障子よ残る一首の歌（葛葉）其行先が戀しくば少〜早く信田の森へと立上る葛の葉やらぬと切て掛る此時狐火燃る片市松之助璃寛高助童子と連何れも下手へ来り童子が母やアイと呼立柏子幕

○三幕目大切「所作事の場」本舞臺上手よ竹本の出語臺真中離段に段幕を張下手よ常盤津連居並び舞臺所々秋草

の土手板能川に鳴子繩を張道具宜敷防付大小出端の鳴物にて道具納留ト上手の霞幕切て落す爰は竹木連中居並び
 ドロ／＼雷序にて花道すつばんへ葛の葉着なほし塗笠銀張の枝狐の面よて糺上る文句よつれ振有て狐の面とれ
 存分有て向ふより保名着流大小緒草履にて童子の子役を脊負ひ二役此葛の葉笠杖よて出て花道は兩人演詞有て保名童子が母ヤアイと呼上るり雷序よて吹替の葛の葉狐くわへ面よて顯れるを見て保名のヤレなつかしや女房葛の葉着子乳を姫の童子を儲け禮も言ひたし兩人演詞上るその内仕掛よて吹替消纏ぐるみの白狐顯出て下手へ遣入兩人演詞渡り上るり有て向ふより旅乗物狹箱提灯よて供廻順能出て此時駕籠の内にて道満の呼掛て留る三人演詞童子と引合せおは是より玉兎集の件演詞上るりよて種々有て童子は是より安倍晴明と名乗と云事有つて道満は安倍の舊領目代方よて休息と保名皆々付て遣入上るり有て卒子大敷よて向ふより悪右衛門好の形卒子四人付出で悪右衛門がヨリヤ者共姫を取逃すなど此時向ふより野かん平捨切奴にて石地藏を荒繩よて脊負出て其處よお出

なさるの且那姫を生捕去よつて参り升たト云ふ故山かした／＼ドレ戀人のお顔と見てヤア姫でいあくて石地藏だハイヤコリヤ面目な葛の葉が石地藏と化された此埋草に草を分て探すとお可笑味にて上手へ遣入跡は殘風の音どつとせし出入有てイヤ已の化さぬと此時どろ／＼み成り花道へ草着童の拵へ草籠を背負ひ笛を吹居る見得にて糺上る上るり臺と離段の段幕切つて落す双方居並び掛合よ成り振事宜敷ト三重ドロ／＼となり跡は演詞仕種有て後ち取巻段切引張の見得先今日は是限

正誤

○一番目大政所(國太郎の役)まうかよ代る○同局の(まうのり)田之助よ代る○同坂東三津三局の役と版せり○二番目の役割中よ小勘平と有ハ狐勘平の誤り

諸藝新聞

毎月月曜日出板半紙摺書入一冊代價三錢六冊十二錢十八冊四十五錢

明治十四年九月三日御届同五日出板○定價五錢
 編輯兼出板人平民 山下金三郎
 麹町三丁目九番地
 東京麹町三丁目九番地假本局 諸藝新聞社